退職にあたって

村田　宏

跡見は私にとって３番目の職場でした。二つの美術館勤務ののち、縁あって本学に移ったわけですが、美術館は、敬愛する友人の言葉を借りるならば〈学問の家〉でした。具体的な内容については省きますが、すくなくとも学芸員経験を有する先生方は、この「美術館＝学問の家」説に同意されるのではないかと想像します。

前職に対するささやかな自負や矜持は、しかし目下の主題ではありません。申し上げたいのは、二番目の美術館の在職期間が最初の美術館のほぼ二倍、そして二番目の美術館のやはり二倍の時間を過ごしたのがほかならぬ跡見学園だったということです。在職年数の長さに応じて思い出されることはさまざまですが、ここでは花蹊記念資料館にまつわる一、二の事柄について触れておきたいと思います。

2022 年３月末まで務めた資料館の館長職は、通常、最大で４年のところ、事情により６年におよびました。どのような組織も同じですが、外側からは見えない多くの仕事を抱えているものです。資料館も例外ではなく、在任中には対応に苦慮することも一再ならずありました。しかし、そうした〈試練〉も今となっては、仄かな輝きを放つ小さな真珠のように感じられます。元来、西洋美術史を専門とする私が花蹊記念資料館に携わることは、資料館スタッフには想定外の珍事であったに違いありませんが、個人的には学祖・跡見花蹊の芸術的業績に触れる絶好の機会となりました。思い違いでなければ、花蹊作品に対する眼差しが多少とも研ぎ澄まされたような気がします。

退職という人生の終幕劇の一つを、いわば身をもって演じつつ、もはや還ることない跡見での年月をふり返ると、ある名状しがたい不思議な高揚感がわき上がってきます。それは永年勤めた職場を離れることに対する老輩のありふれた感傷と言うべきものでしょうが、他方で離職後に訪れるはずの自由な日々へのひそかな胸の高鳴りと同義であるようにも思えるのです。

これまでお世話になった人文学科の先生方にあらためて御礼申しあげます。みなさまのご健勝、ご活躍、そして人文学科のご発展を心より祈念いたします。